

# 私のアダム・スミス研究

My Studies on Adam Smith

水 田 洋

MIZUTA Hiroshi

今日は、スミスについて話をさせていただきます。

ぼくは60年ほど前にここ（東京商科大学予科）に入学し、小平の予科に3年いて、戦争が始まった年に3か月繰り上げで卒業させられました。戦争中はジャワで酒を飲んで暮らしていましたが、勉強も多少しました。占領地にあるジャカルタ（そのころはバタフィア）法科大学でボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像への移行』という、その当時日本にはまだ数冊しか入っていなかった本を見つけ、タイプでコピーして帰り、それを手がかりとして近代思想史の研究を始めたのですが、その1つの頂点がアダム・スミスであったというわけです。

60年前に入学したと言いましたが、そのときの高島先生の学部ゼミの1年のテキストがスミスの『国富論』、2年のテキストがホップズの『リヴァイアサン』でした。ホップズのこの本の翻訳を岩波文庫で出しましたが、約40年かかりました。イギリスの近代思想とは何かということを中心テーマとしてずっとやってきました。その成果の1つがアダム・スミスの蔵書目録ですが、オクスフォード大学出版部から出るようになっていて、むこうがコピー・エディティングしたものを送ってきて、それに対する回答をし、一応手続きは終わったのですが、いろいろ問題がありました。たとえば、アリストテレスをイギリス流にアリストートルとしると言ってきたのですが、このカタログはインターナショナルなものであって、イギリスだけの出版物ではないので、アングリサイズすることはないだろうと返事してやりました。アリストテレスだけではなく、例えば、ホメーロスをホーマー、ホラティウスをホレスとしている。これは英語帝国主義であって、古典の著者の名前まで英語読みにしてしまう。ドイツ人はわりに正直に元の読みに従って、アリストテレスはそのままで。固有名詞の読みは難しく、特にカナで表記するのは難しいのですが、できるだけ原発音に近づけるということをして、ぼくは一橋大学の初代学長の上原専禄さんから習っていらい、それを原則としています。こういう調子なので、スミス蔵書目録はいつ出るかわかりません。

60年前の状況についてももう1つ話をしておきたいと思います。ここに持ってきた本をお目にかけます。これは当時既に出ていたマルクス・エンゲルス全集の第25巻で、『共産党宣言序文』の翻訳のところです。宣言の本文は発売禁止なので苦肉の策として序文だけでも、ということなのでしょうが、ご覧のとおり、『××××××××』となっています。そういう本を解読して暮らすのが当時のわれわれの学生生活の一部であったわけです。ぼくが本科にはいった年でしたか、高島さんの経済学史の講義をききにいったら、いつも最前の列にいる上級生が1人もいないんです。夕方になってわかったのは、その朝6人ぐらい検挙されたということで、なぜ検挙されたかということ、読書会をやっていたからだという。多分テキストは農業問題についてのものだったと思います。僕が参加したのは、大河内一男さんのドイツ社会政策思想史の読書会でした。そういう学生の読書会を共産党の運動だとして、しらみつぶしにした。戦後特高の調

書がでていますから、誰と誰が検挙されたかわかります。

そういう時代にアダム・スミスを読み、ホッブズを読むことがどういうことかという、今の学生諸君にはわからないでしょうが、警察権力、軍国主義、あるいは天皇制に対する反発、つまり上からおおいがぶさってくる権力に対する抵抗であったわけです。中学時代、ぼくは青山に住んでいましたが、青山で市電に乗り、表参道から永田町の今の日比谷高校に通っていました。明治神宮前を通ると、車掌がただいま明治神宮前ですとあって、乗客は御辞儀をさせられます。そういう抑圧に対する反発、そういう状態のうっとうしさに対する反発から自主性は生まれます。大学で一番大事なことは自分の頭でものを考えることであって、その中で最初に何を読むかは、考えのきっかけをつくるのでかなり重要です。ぼくの予科時代にはいろんな読書会がっているんなものを読まされましたし、ゼミナールではホッブズやスミスをやりました。予科に入ったとき、当時の学長の上田貞次郎という人が来て、いきなり『国富論』を読めといわれました。そこで予科の2年の夏に『国富論』をEveryman文庫版で読んだわけです。

その後イギリス思想史をやるようになりましたが、それらを読んだことが一番の基本になっています。近代思想全体の基本は個人の生存権だと思いますが、基本的人権を基礎にして国家をつくるという論理がホッブズの『リヴァイアサン』にあります。それを読んだのは学部2年のときで、あらっばい言い方をすれば、それぞれの人間が生きる権利を持っており、これは譲ることができない。そのために何をしてもよい。しかし、何をしてもよいということになると、殺しあいが起こる。生きるために殺しあいをするということは、それ自体論理的に矛盾している。そこで調停するために国家が必要だという自覚が生まれ、ホッブズがおそらくはじめて、基本的人権である生存権から国家を構成する論理を組み立てた、ということだと思います。それから少しとばして言いますと、そういう状態が平和に継続するためには、つまり生きるためには、ものをつくらなければなりません。みんながものをつくって、交換するという形で、その論理として経済学、スミスの『国富論』ができる、ということになる。

ここはホッブズの話をする場所ではありませんけど、生きるために国家をつくる、つまりこれはある意味で国民権ということですが、そこには確かに論理的矛盾があります。国家は自分たちが生きるためにつくったのだから、その権力に自分たちが服従しなければならないということにもなりますが、逆に、出発点としての人権は手段としての国権をこえるということにもなります。基本的人権、生存権が基本だということを実感したのは、60年安保のデモの中で、国会を包囲しているときでした。ホッブズはむしろ絶対主権を主張したんだという意見もあって、たとえば明治政府は、『リヴァイアサン』のなかの人権論をはぶいて、国家論だけを『主権論』として翻訳出版しました。

スミス自身についていえば、スミスにははっきりした政治論はありません。つまり、イギリスの18世紀には安心して生活できる状態がすでに出来上がっていた、だから国家権力の性格にふれなくてもいいとスミスは考えていたのではないかと思います。スミスに政治論がまったくなかったということではなく、ホッブズのように、政治権力の形成原理から組み上げるということをしていないということです。

よく御存知の方もいらっしゃるでしょうが、念のために申し上げておきますと、スミスは単なる経済学者ではなくて、道徳哲学の教授でした。経済学が一人前の顔をして大学の中を闊歩するようになるのは、ずっと後のことです。ただし、Political Economyという題の本は『国富論』の9年前に出ています。スミスは『道徳感情論』という本を1759年に出し、1776年に『国富論』を出します。それぞれ版を重ね、少しずつ変化して行って、死ぬときに最後に出し

たのが『道徳感情論』第6版です。これは初版の2倍近くになっています。スミス自身も言っていますが、スミスは『道徳感情論』を自分の主著だと考えていました。『国富論』はその一部だということを言う人がいますが、それは当たっていると思います。スミスは1790年に亡くなるのですが、その後遺稿を編集したのが、『哲学的主題に関する論文集』、普通『哲学論文集』とっているものです。その中には、芸術論も天文学史もあります。というわけで、スミスはかなり多方面な人でした。それぞれアマチャーとしていいかげんなことを書いたのではなく、それぞれが一通りの力作なんです。このような多方面の活動をする人がいなくなったのは、19世紀の半ば以降のことです。現在は専門化が進みすぎてしまって、隣の分野のことがわからなくなっている。ノーベル賞をもらった湯川秀樹さんが晩年に繰り返して言っていましたが、今は総合しなければいけない。このことは社会諸科学についてもいえると思います。専門バカに対する批判として、われわれはスミスやその他スミスと並ぶ思想家たちから学ぶべきものがあるのではないかと思います。

スミスのいくつかの領域での著作は、ばらばらではありませんでした。例えばスミスの天文学史は古代天文学史ですが、古代の人は天体を見て、これを何とか説明したいと考えた、説明していくと1つの天文学の体系が出来上がる。ところが見たことも聞いたこともない彗星が現れる。これは今までの天文学体系では説明できない。すると天文学体系を組み変えなければならぬということで、新しい天文学体系が出来上がる。これは学問の進歩の一つの過程だとスミスは説明しています。3、40年前にクーンというドイツ系のアメリカ人が科学革命ということを行い、いまいった形で科学の体系が新しく更新されていくということをいっています。スミスは、クーンの科学革命論の先駆者だという説もあるくらいですが、いまわれわれにとって問題なのは、スミスが今までの体系では説明できない社会的事実として何をつかまえたかということです。いくつもあります。例えば労働labourです。labourというのは誰でもできる特殊化されていない普通の仕事であって、苦痛のもとでもあった。これに対してworkは職人仕事で、楽しいものです。スミスは、labourを、人間が生きるために必要なことで、社会の一番基礎を担うものだとして、経済学の中心にすえます。そういうように軽蔑されていた社会の下積みになって社会を支えている人が貧しい暮らしをしているのは、きわめて残念であるということも言っています。スミスは、人間の労働というものを、社会が存続するためにどうしても必要なものというように組み変えていった。しかもその労働を抽象的な人間労働あるいは賃労働としてとらえます。これは天文学史の方法を、天文学史から学んだ方法を経済の分析、社会の分析に使ったということです。

もう一つ、初期の論文の一つ、2号雑誌で終わったエディンバラ・リヴューにのった論文で、スウェーデンのリンネウスやフランスのビュフォンの分類学による自然認識の体系化の重要性を強調しています。この分類学は、普通は博物学、あるいは自然誌といっているもので、自然のさまざまなデータをできるだけ集め、共通なところをとって分類していく分類学です。細かいデータを収集して、共通なもの、共通の概念をつくり上げ、そして概念の並立の中から1つの体系をつくりあげる。これが学問なんだということをいっています。事実から出発した学問体系ということです。

それからもう一つ、今の論文よりも10年あまり後に言語の形成に関する論文を雑誌論文として出しています。その当時のフランスでも、コンディヤックやルソーによって言語起源論が書かれている。スミスは日記や手紙をほとんど残していないものですから、どのくらい彼らの影響を受けているかはわかりませんが、とにかく一定の影響を受けている。この言語起源論で彼

は、次のようなことをいっている。すべての木をまとめて表現する木という言葉は、あの木この木という個々の具体的木がまずあって、それらの共通点を抽象することによって、名詞としての木ができる。分類学でもリンネウスやビュフォンは個々の動植物から共通点をとりだして分類するわけですね。このような言語の形成、分類学が、学問の起源だということになる。スミスは労働の概念の処理の仕方を天文学から学んだわけですが、同じように社会的なさまざまな事実を分類・整理して体系化していくという方法を言語起源論や大陸の博物学から学んだんだろうと思う。そのような方法論で『道徳感情論』や『国富論』をつくりあげたわけです。その方法を社会科学に応用すると次のようになる。まず個々の人間がいる。それぞれの個性性と共通性に注目して雑多な世界に脈絡をつけていくというのが社会科学という学問の仕事だということになる。最近流行のポスト・モダンというのは、脈絡をつける前で終わっていて、ばらばらです。

近代思想というのは、現実にあるものをまず認めて、それを整理していくという方法をとっています。ここにカトリックの方がいると具合がわるいんですが、それまでは要するにまず神が最初にある、つまり遍在的な神がある、個々のものからではなく、上の方から個々のものを説明していくという方法をとっている。典型的な例を挙げますと、人間というものは理性を神から与えられているから、神の秩序というものをその理性によって認識できるはずだし、その秩序に従うべきだ。大雑把にいうと、そのように考えていた。これは実は、われわれの学生時代の天皇制と同じ論理なんです。日本人というのは天皇の赤子であり、天皇の身内であるという考え方です。学生時代に何か押しつけがましい、憂鬱なものがあるといったのはこのことです。学生時代のぼくの天皇制に対する反感は、近代的なものの考え方を模索していたんだろうと思います。ホブズは、神ではなく個人というものを真っ先に出し、個人が生きることから社会を組み立ていくという考え方です。個人をばらばらにしていくというのがポスト・モダンの考え方ですが、ばらばらな個人がどうしたら生きていけるかという話がそこでは抜け落ちている。

スミスは言語起源論、分類学を基礎にして、個々のものから社会を組み上げる。ホブズと同じです。違うのは、スミスは生きるためには生産しなければならないということをはっきりと述べているところです。『国富論』では、生産、交換、そして自由競争を論じている。普通、高校の教科書なんかでは、スミスは自由放任を主張したと書かれていますが、スミスはそんなことはどこでも言っていない。ぼくの先生の高島先生も、岩波新書の『アダム・スミス』で、それは間違いだと言っています。つまり自由競争ではあるが、自由放任ではない。その論理が最初の著作である『道徳感情論』に書いてある。それ以前には自由放任の思想の先駆といわれるバーナード・マンデヴィルがいます。スミスより50年ぐらい前に、『蜂の寓話』という本を書いた人ですが、かれは普通自由放任の先駆とされている。ハイエクなんかはしきりにそれを持ち上げている。ハイエクという人は随分勝手な解釈をしますから、ぼくは信用していません。ハイエクには一度会ったことがあります。スミスの故郷のカーコーディでぼくが講演したときに、ハイエクは一番前の席に座っていて、終わったら、自分の耳がわるくてよく聴こえなかったのです。すみませんがあなたのペーパーをくださいというのです。自分の耳が悪いのではなく、あなたの発音が駄目だからというのが事実なんです。ものは言いようだと感じました。それはさておき、ハイエクは、思想を自分勝手にゆがめている。もっともハイエクの方でも同じことをぼくにたいして言うかも知れませんが。思想史というのは、自分の生きているところから歴史を振り返るわけですから、多かれ少なかれバイアスが入る。歴史と自分とをいつも往復

して、修正していく。そのことによって歴史が見えてくる、自分の立場が見えてくる、そしてそれが修正されるということがある。その往復運動の今の時点でどう考えているかというのが、今ここで話していることなのです。それは変わるかも知れませんが、だからといっていいかげんなことを言っているのではなくて、自分の責任をもって話しているのです。最近無責任な学者が増えましたが、研究者の責任はかなり重いものなのです。

マンデヴィルの話をしましたが、マンデヴィルの『蜂の寓話』というのは、人間社会を蜂にたとえて、それぞれの蜂が自分の利益を追求すると、蜂の巣は繁栄する。つまり利己心の自由放任で社会は繁栄する、簡単に言えばそういうことを述べています。その蜂の活動にはいろんな悪いが入っているのを、それを止めさせようとしたら、蜂の巣がぼったり活動を止めてしまって社会が衰えたというのです。だからマンデヴィルは自由放任にしろといっているのだとみんな受け取っていますが、そこにただ1行、正義の剣によって取り締まればというのが入っています。だから完全な自由放任ではないのです。マンデヴィルの意図が何であったかについてはいろいろ議論がありますが、自由放任にすれば悪徳と共に社会が栄えるということではなくて、自由放任で栄えるとその裏にはこれだけの悪徳がありますよという言い方をしている。これはマンデヴィルがそれを書いて以来続いている論争なんです、マンデヴィルは悪徳があっても繁栄した方がいいと言っているのか、繁栄のかけには必ず悪徳があるから気を付けろと言っているのか。

1724年ぐらいからずっとこの論争が続いているのです。スミスが『道徳感情論』と『国富論』を書いたのは、そういう論争が始まった後ですから、当然それはスミスの頭に入っているわけです。この問題に対するスミスの答えは、有名な同感の理論です。人間がそれぞれ自分の利益を追求するのは当たり前だ、当たり前な利益追求はどこまで許されるのか、ということで同感の理論を使うわけです。同感の理論というのは、まず第1に自己中心的な考え方、例えば喜びでも悲しみでも、自分一人であれば思い切って感情を表に出すだろう。しかし、そばに誰かがいれば、自己中心的な感情は当然抑えられる。隣の人が認めてくれる範囲に、つまり隣のひとが見ていて、この人がこういうめにあっているとこれだけ悲しんで泣くのは当たり前だと思う、自分でもそうなるだろうと思う、そういう隣の人の承認する程度に、当人も感情を抑制する。これが同感です。人間はすべて自分中心だけれども、自己中心的な考え方・行動の限界は他人が認めてくれるところだ、他人がどこまで認めてくれるかということ、お互いにここまでは一緒にやりましょう、ここまでは自分中心的な活動をやりましょうということです。だからスミスは、泥棒の世界には社会は成立しないといっています。自分が泥棒したら、泥棒されることを許さなければならないからです。つまりスミスが言っている自己中心というのは、お互いが許しあえる程度という枠がはまっているのです。それをスミスはフェア・プレイと呼んでいます。フェア・プレイというのは、スミスが考えている近代社会の原則です。だから自由放任ではありません。スミス自身も言っていますが、あなたが自分の利益を追求するのは当たり前ですが、他の人もあなたと同じような権利を持っていることを忘れないように、ということです。ところが今の日本の経済学者には、例えばパブルの崩壊について、パブルを批判するのはパブルで儲けそなった人のひがみだという人がいます。この大学の教授にもいます。

スミスは『道徳感情論』を基礎にして『国富論』を書いたのです。さっき言った「天文学史」というのは、確かに遺稿の中に出てきますが、スミス自身が青年時代の著作だと言っていますから、おそらくそれは1740-50年のあいだ、つまり『道徳感情論』や『国富論』を書くよりはるか以前だと思います。言語起源論や分類学もやはり同じ頃です。青年時代にそういう学問に

対する心構え,方法態度が自然に出来上がっていて,それから社会哲学としての『道德感情論』,あるいは『国富論』の経済学をつくりあげていった。自分で振り返ってもそう思うのですが,大学時代と大学を出てからの数年というのは,基本的なものの考え方が出来上がる時です。長期的にみると,これは大変重要なことです。

ホッブズからスミスへの自由というのがどういう意味を持っているかということをお話しました。比較になりますが,その後のイギリスにはジョン・ステュアート・ミルという人がいます。ジョン・ステュアート・ミルが,『代議制統治論』Representative Governmentと『自由論』On Libertyという,イギリス自由主義の正統の本を書いていて,二つとも岩波文庫に翻訳があります。その中で自由主義の1つの特徴として,反対意見をつくり出せということを行っている。例えば政府が意見を出すとき,反対意見がなければつくり出せと言う。誰でも自分の意見を出す以上自分が正しいと思うのは当たり前ですが,逆にそのために自分の欠陥がみえなくなっている。どこかに間違いがないか,反対意見をつくり出すことで検討できる。反対意見が出たときは結局は妥協になりますが,多数決は最後に来ることなのだ,ということを行っています。最後には多数決で決めるにしても,その前にやることではないか,ということです。それはスミスが言った,他人が認めてくれる程度に自己主張をするということの1つの形態です。

イギリスだけではなく,マックス・ウェーバーという,1920年に56才くらいで亡くなったドイツの学者が,同じことを言っています。ウェーバーは,社会科学は価値判断に関わらない, Wert frei価値自由ということを行っています。社会科学自身は価値を選ばないけれども,社会学者は自分の責任で価値を選べというのが, Wert freiの考え方です。そのとき,目的つまり価値をえらぶのは科学の仕事ではないが,目的・手段の適合関係を検討するのは科学の1つの仕事だと言っています。ミルはある主張に対して反論を出すように,反論を育成しよう,反論を育成するのはマスコミの仕事だと言っています。ウェーバーは,ある目的に対してある手段が適合かどうかを検討するときに,この手段をとったらこういう副作用が出るということまで検討せよと言っている。つまりある提案に対して,副作用を明らかにするという意味で,反対意見を検討していく。副作用は目的つまり価値を否定するようなものであるかもしれないし,そうであれば手段の検討という形で価値を検討し,修正または否定することになる。これが科学の仕事だというわけです。政策の提案者なり行為者は最後には自分の責任で価値を選びとるわけですが,その前に反対意見を検討せよというわけです。ミルとウェーバーは,このように合流している。

日本では自由競争を夜打ち朝がけも自由だと理解している。これは日本の企業が外に出て行ってやっていることです。インドネシアがあんなことになっているのは,そういうことから来る腐敗が原因です。つまり手段を選ばないのです。自由といっても,ヨーロッパの伝統的自由主義の自由と日本の自由とはかなり違っている,反対でさえある,ということを感じています。

今日はホッブズからアダム・スミスへと自分が学生時代にこの大学で読んで,それから日本の社会を見る目をどのように学んだかという,大変個人的な話をしましたが,ひとまずここで終りたいと思います。(拍手)

(名古屋大学名誉教授,学士院会員)

1999年5月28日 社会科学古典資料センター主催講演(於 佐野書院)講演要旨